畫圖西遊譚

書名 畫圖西遊譚
全五冊之内
第参巻
年 月 日
第 號

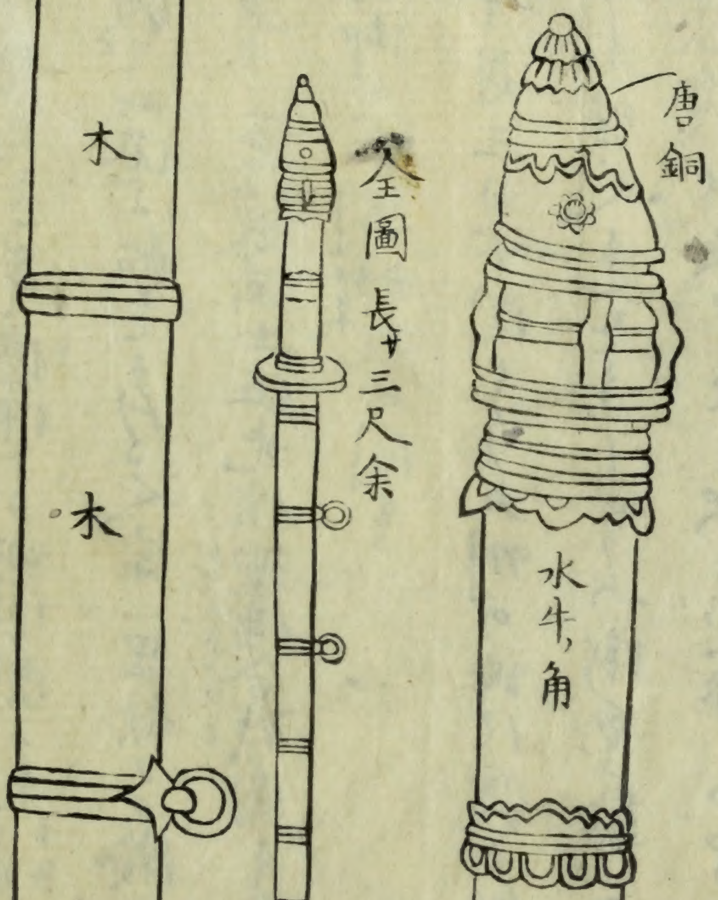


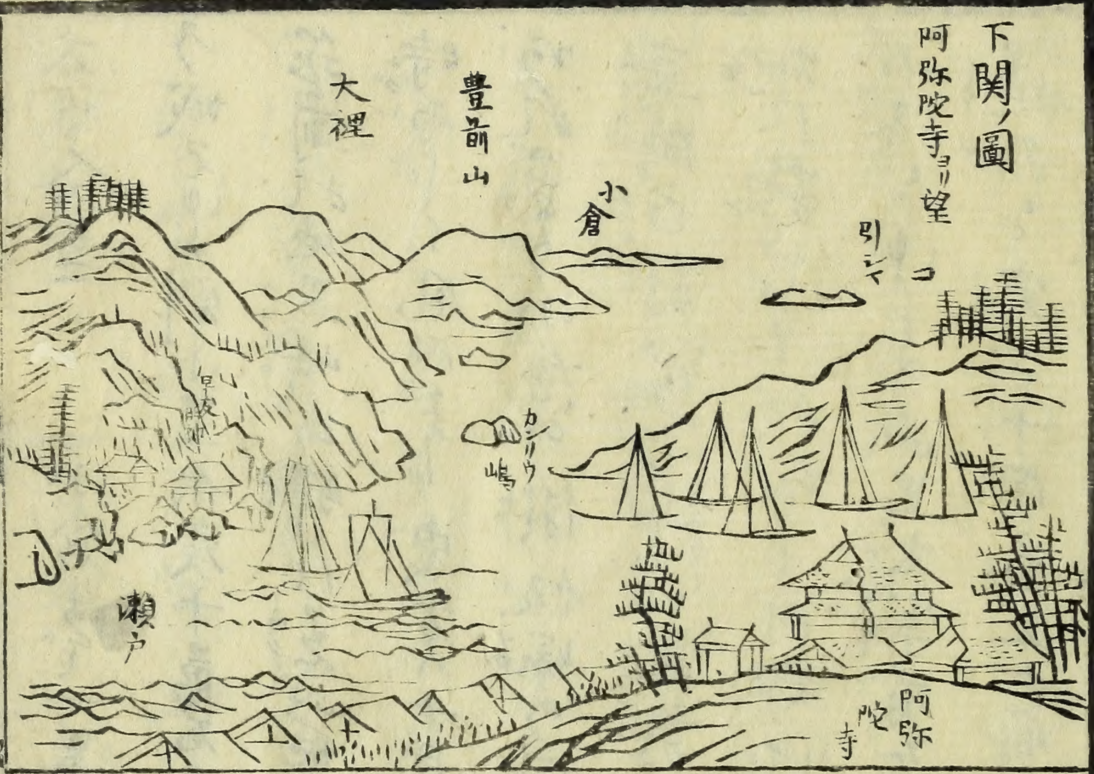
西遊旅譚巻之三

扨長府をさりて檀浦(ダンノウラ)より赤間ヶ関ニ至(下ノ関トも云)長崎の方より玄界灘(ゲンカイナダ)を渡りて此港へ船をとめる人家一里餘ニ瀬戸(セト)口山上ニ阿弥陀寺宝物(ホウモツ)多し古法眼ノ画土佐光信檀浦合戦(ダンノウラガツセン)図ニ丹能登守ノ太刀安徳天皇の御太刀異形(コトナルカタチ)故ニ図す

十月三日下関より九州の地に渡る時に大風吹出し波濤(ハタウ)高く皆人色をうしなふ漸ク難をのかれて大裡(タイリ)に着(此處大裡ハ一里半小倉ヘ三里なり)此海中にて次兵衛塚といへるあり秀吉の(船頭なり)引島(ヒコ)又田ノ首(クビ)とも云(平家の一門引退きたる島なり)

安徳天皇御太刀之圖




下関ノ圖
阿弥陀寺ヨリ望
豊前山
大裡
小倉
カンリウ嶋
瀬戸
阿弥陀寺


下関を船より眺
長州山
カンリウ島

大裡(ダイリ)人家二三町あり小倉まで一里半汐し海を左の方に見る小倉の城えゆる則小笠原侯十萬石の城下にて市街(イチマチ)縦横(タテヨコ)あり夫より筑前の地黒崎(クロサキ)の驛(エキ)に至る此宿より長崎の方へ行より来るので時雨(シグレ)し風雨多し東方ハ十月の小六月にて東西風土に違ひあれバなり小屋の瀬(セ)飯塚(イヽヅカ)の間五里ばかり田邊川(タヘカハホリ)堀に鶴多し真鶴(マナツル)白鶴(シロツル)〔白鶴ハ全體白しハレトアレウス赤し〕黒鶴(クロツル)〔小ニシテ黒ク頭赤し〕筑前の地總じて平野(ヘイヤ)田畑(ハタ)に鶴(ツル)おりし飯塚より内野の右の方に入田畑をすぎて山路をゆくの四里太宰府(ダザイフ)あり此路甚(トテモ)の山中なりて大石道路(ダウロ)を塞(フサ)ぎ十間(ケン)又ハ五六間なるもあり天満宮大鳥居

旅館多シ門を入て池あり橋三ツかゝる 過現未ノ三橋ト云 山門をいりて本社左
右廻廊(クハイラウ)にして神さびたる地なり池乃邊(ホトリ)大楠多し毎年
八月廿一日より廿六日まて祭禮(サイレイ)アリ近郷より参詣多し 天原山
安樂寺と云 寺ニアラズ地名ナリ 岩踏川社乃跡の方三里ヲ在 思(ヲモヒ)川
宰府町西へ流るゝ川也愛(ソメ)染川社の南にあり 哥に
かくすまう又ぬるゝとも秋乃露いはぬ川の末乃しらなみ
白川ハ宰府町西南にあり 哥に
むはたまのわか黒髪ハ白川乃みつはくむまて老にけるかな
観世音寺 清水山普門院 博多(ハカタ)へゆく道(ミチ)あり 博多へ四里 戒壇(カイダン)院観世音寺

ちく近し都府樓(トフロウ)の跡(アト)也又安徳天皇の殿のありしところとぞ先年
此寺本堂の下より瓦二枚を掘出せり生焼(スヤキ)にして赤色伊部(インベ)
やきのごとしさる人の物かたりし是都(ト)府(フ)の古瓦なりと菅
丞相の詩にあり纔(ワツカニ)見(ミル)瓦色(カワライロ)此寺より六七町をへだてゝ田の
中に礎(イシズヘ)あり方五六尺央(ナカバ)より丸柱の象ありて總(スベ)て此邊
缺瓦(カケカハラ)多し表に忍冬なぐら裏布目ありて陸奥多賀城の瓦
のごとし二日市針すりれ雲あまりて見ゆる幸橋(ミユキバシ)のあたり
多ればまことにふるさとゆかしき先輩なきしとかしきし
四方寺山(テンフヤマ)高橋紹運う城跡なり天拜天神の祠ハ温泉町の

上天拝山乃中程にかゝり漆川 哥丹

名のごとく水の黒きやうにもみえて流るゝ川なりとて人はめづらしがる

其外苅萱の関乃古跡水城乃跡の古跡を拂宰府ハ四面

山繞て海ハ福岡のかたに隔りて故ら寒月雪深しといふ

夫より原田ハ出て田代ハ中にて筑後乃高良山乃中

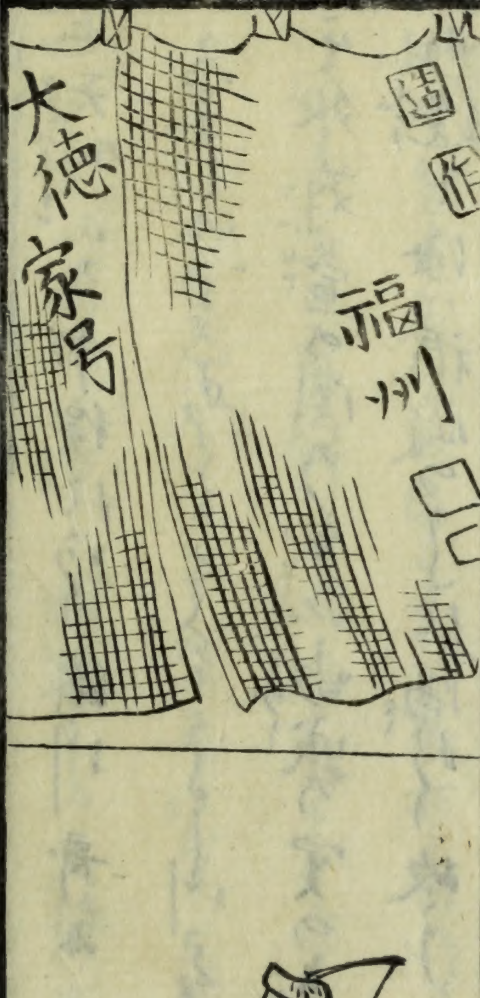
原より彦山ハ此路を是ぐらゐ十六里又久留米の城見ゆる

有馬侯の城下 中春より神崎の方に喜鷭多し此所より高麗

烏といふ又此あたりにて索麺を作る作賀 鍋島侯の城下 城下

町二里余人家綺多く冨商おほくして婦人乃粧の風

江戸より仙臺より境原までハ錢一文を一まい二文を二枚
とよぶ言語もいさゝかづゝ異なり此邊過ては石乃多びとゝなた
かゝる中春ハ寒月雪を積む事二三尺小田に至る此背
農人の家ごとに暖簾をかける麁布なり此もの
支那より荷物を包來る莚なり圖のごとし





夫より成瀬川をわたる又塩田へ行越(エノミ)を越嬉野(ウレシノ)茶ヲ出スより彼杵(ソノギ)此間大山坂を越て大村に至る十町ばかり左右家中屋敷の半は桜を植置(ウヱ)たり是れば大村城下人家続(ツヾ)く十月九日市(イチ)街(マチ)戸毎(コゴト)に注連(シメ)を張香を焚(タキ)燈(アカシ)てこれを祭る此地疱瘡をきらふ此辺ハ西国流行(リウカウ ハヤル)をおそれ除(ヨケ)んがためとて町はなれに迄より舟にて海湾(ウチウミ)なれど小島多し景又佳(ヨシ)長井といへる所迄七里舟より行事十余町時津(トキツ)に至る大村ノ領地是より(コレヨリ)長崎へ三里鯖(サバ)腐石(クチラカシ)道端(ミチノハタ)に在(ガム)中野村平野村などいふ村ぞの路(ミチ)常の犬をつれば皆狆(チン)なり小童(コドモ)多くは筒袖をきる(キル)唐人風(ニウツル)

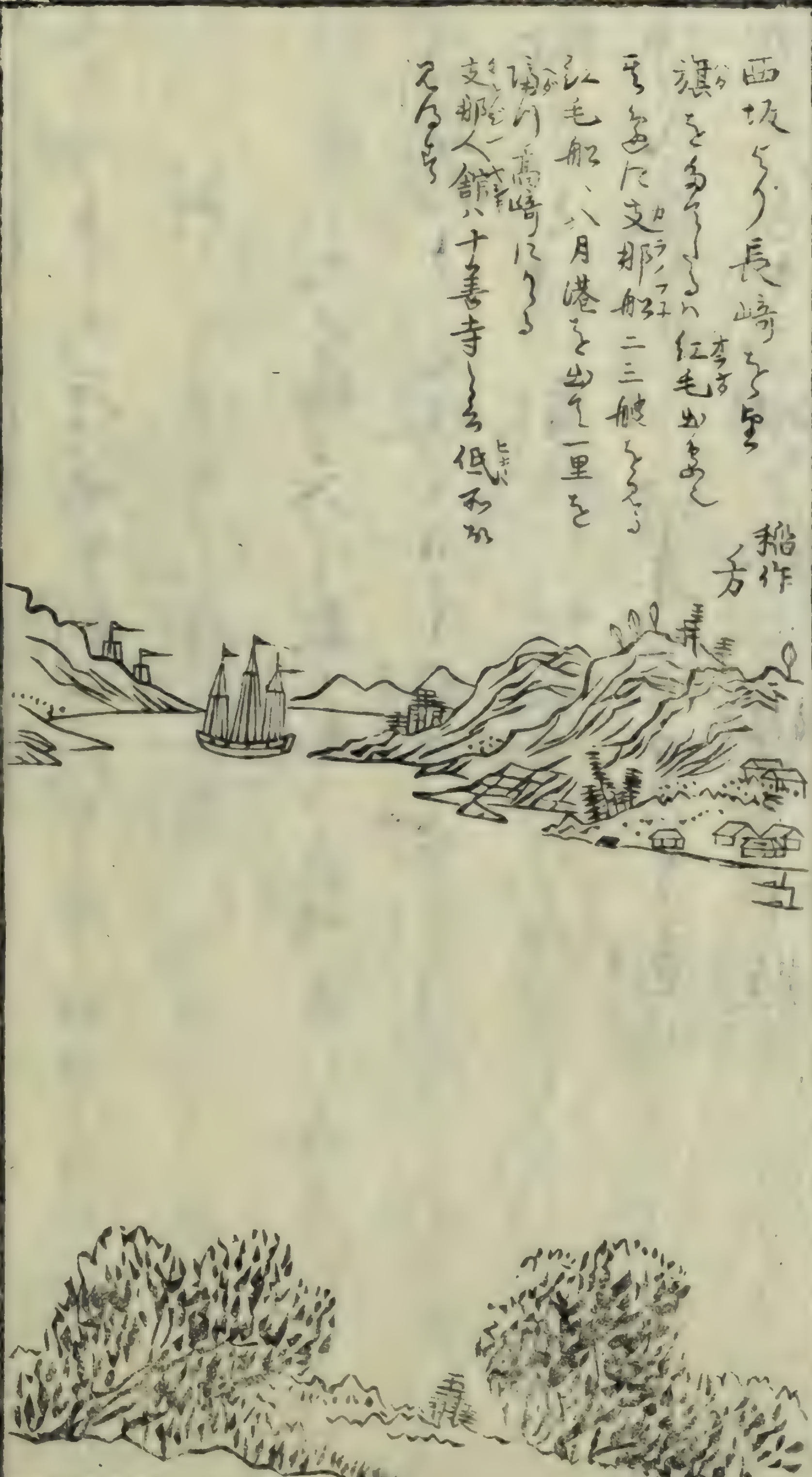

鯖腐石数丈ニ聳テ
上の石危く懸る
土民の曰サバといへる魚を
荷てこゝをとほる人石乃
おちかゝらん事を畏
祈りて鯖乃くさり
けれハこれを名とす


山中大石ニ
仏をきざむ
手崎入江
ナリ

又石階(サカ)多し大石に佛を刻(キザム)したるもの甚多し胡羊(ヤギ)豚(ブタ)
雞(ニハトリ)を畜(ヤシナヒ)長崎市中唐人(タウジン)和蘭(ヲランダ)に售(アキナフ)西坂より長崎をみる
坂より下りて長崎へ入れば数多留(トヾマ)る長崎市中海岸に家を作(ツク)る
故に石階(イシサカ)多し又橋(ハシ)も石もて作(ツク)る婦人(フジン)は生涯(セウガイ)一生眉(マユ)を剃(ソリ)指(ユビ)に
輪(ワ)をはめる唐人ノ言なり言語(ゲンギョ)いろいろ放言(ハウゲン)といふもの二三を載(ノス)見(ヨ)○バボウ
姉(アネ)或は娘を○ゴヾ人の妻(ツマ)を○ヲカツサン色情(シキジヤウ)を○相思(シヤンス)唐韻ナリ踏(ツミ)
壇(ダン)石を○キンバ皿(サラ)を○バセウ遊里(ユウリ)など散歩(ゲメク)を○スヲフリ番椒(タウガラシ)
を○コシヤウ物を與(アタフ)るを○シケンカアジイといふを○コレシ子余程(ヨホド)
たい○ヤツト親父を○チヤンといふ又言(コトバ)の中に○バツテンといふ事あり

ミヤコ錦ゝ語よりもしは風土暖かにして正月雪降ずして園中にて橙を植

畦ニ用ユ琉球芋多し　赤白二品有　赤蕪も太根ハ緑しケラノ尾といふ




山に田畑を
作くる

支那人館ハ十善寺といへる寺ニアラズ地名なり中に社稷を祭る又関帝堂あり帝命を奉して渡海する者古ハ范氏中ハ王氏今ハ銭氏の人来るもの十二家なり是ハ自分一己の交易に渡海を許す蘇州の人也則蘇州ハ日本ならば大坂の如き地なりして南京第一乃繁栄の所なり今ハ七八艘の渡海して十二艘まで及び程赤城といへるもの浙江のうち乍浦といふところの人にして十五年以前より長崎へ来る又方西園といふ者ハ画を好む人八九年以来渡海す福建の人なり又孫周壬禄宋敬庭の類数年渡海して

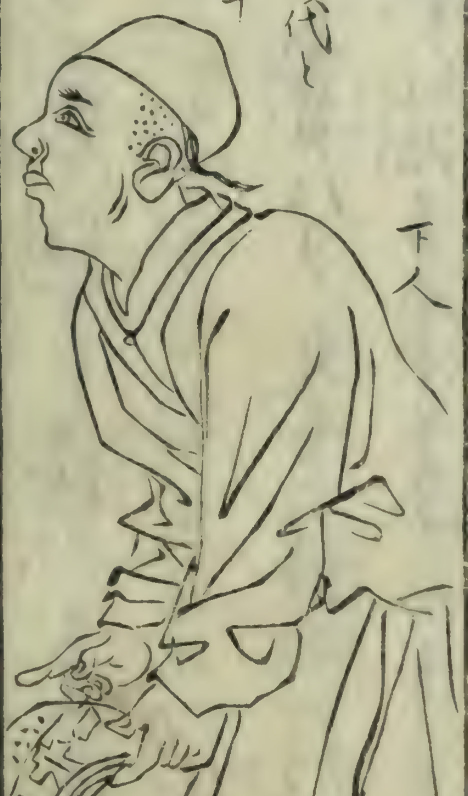
かつへども書畫を作さゞるもあれど其名きこえたりまし
草亭撲庵宕山可亭皆書をよくし伊孚九山水の画
ありて皆此輩商賈にして交易の餘暇此技あり日本にて
商家といへども哥俳諧書画を学ぶもの多し是又此にならへし
能画能書或ハ文雅を賞するとたゞし近ころ沈南蘋一人
能畫よくして画師なり又近年来りたる方西園ハ交易に
疎からし画をよくし多くハ水墨にして着色ハ少し師とも
いふ者周西山名ハ選此一人ハ北京の産にして遊歴して南
京より蜀の頃長崎へ来る此者一人ハ文雅の者にて能書畫

ことはの一日船をうかべし帰帆して宮を避るもなし南京寺或悟真寺をし度て寝閣して書画を見る又此方よりも画など贈る総て支那人ハ日本人をうやまふ事たゞし志をあらはして雅も俗も好む又顔面日本人のごとし只衣裳のかはりあるのみなり

支那人之図

明亡て今ハ清の代となる乾隆五十三年也風俗如図

頭ハメグリヲ剃テ中ニ髪ヲ置ク



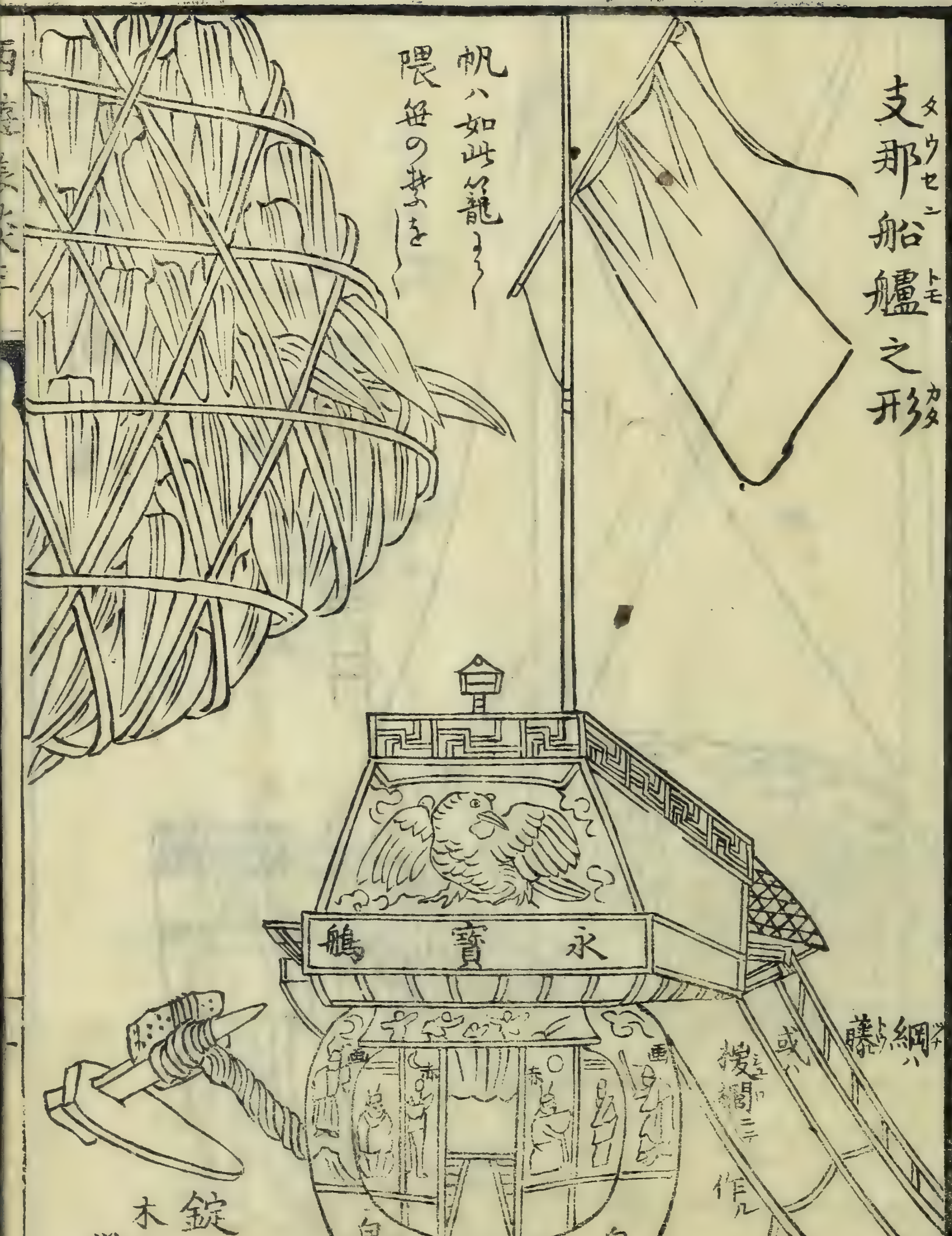

乾隆帝天下を巡狩する事四度歳九十餘といふ



露臺之圖 夏月涼所也

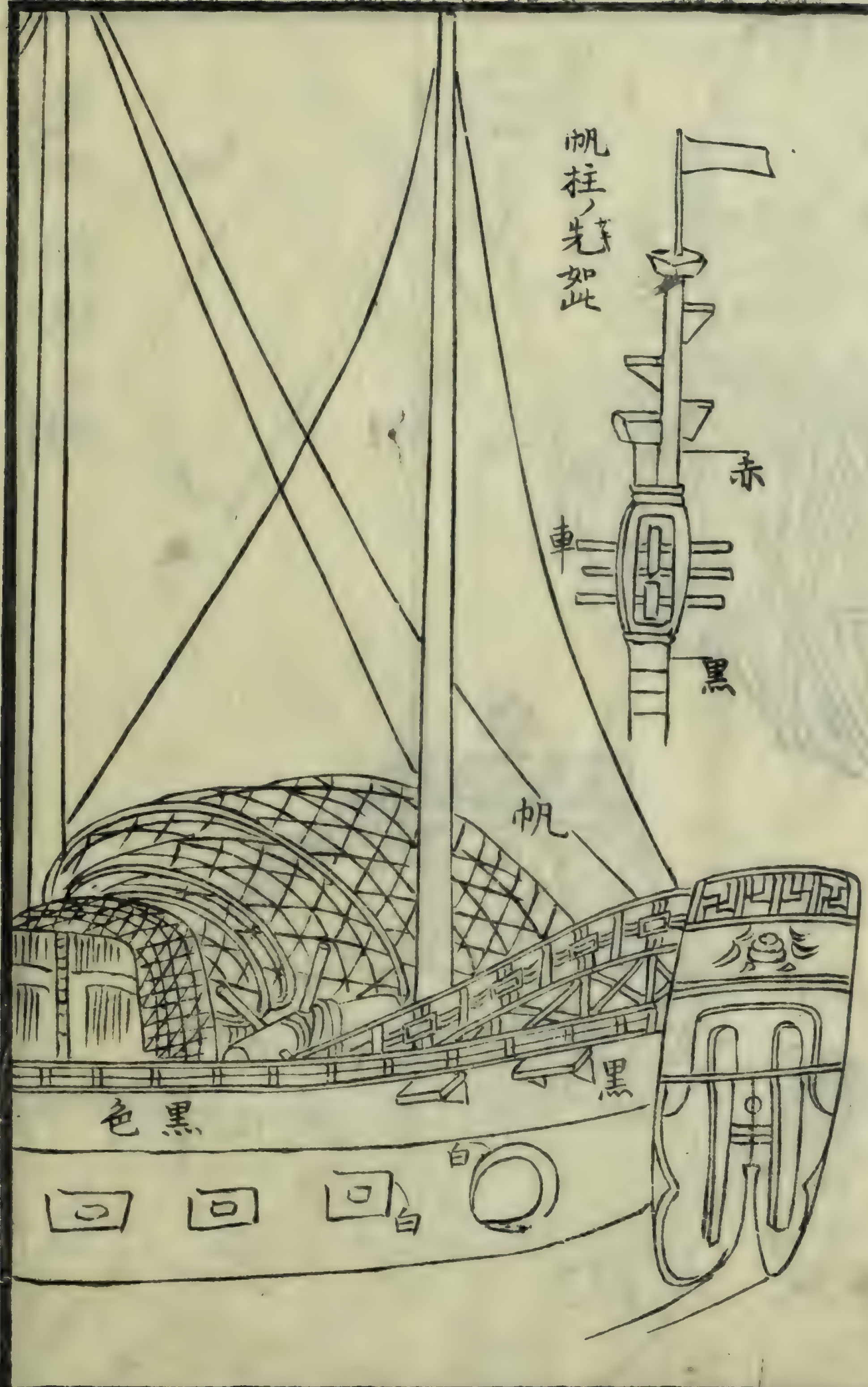
支那人居宅ハ日本にて家を作りワき
なかうるゝ作りかたなし 日本のぬく
客あるとき必ず時ハ毛氈を敷也

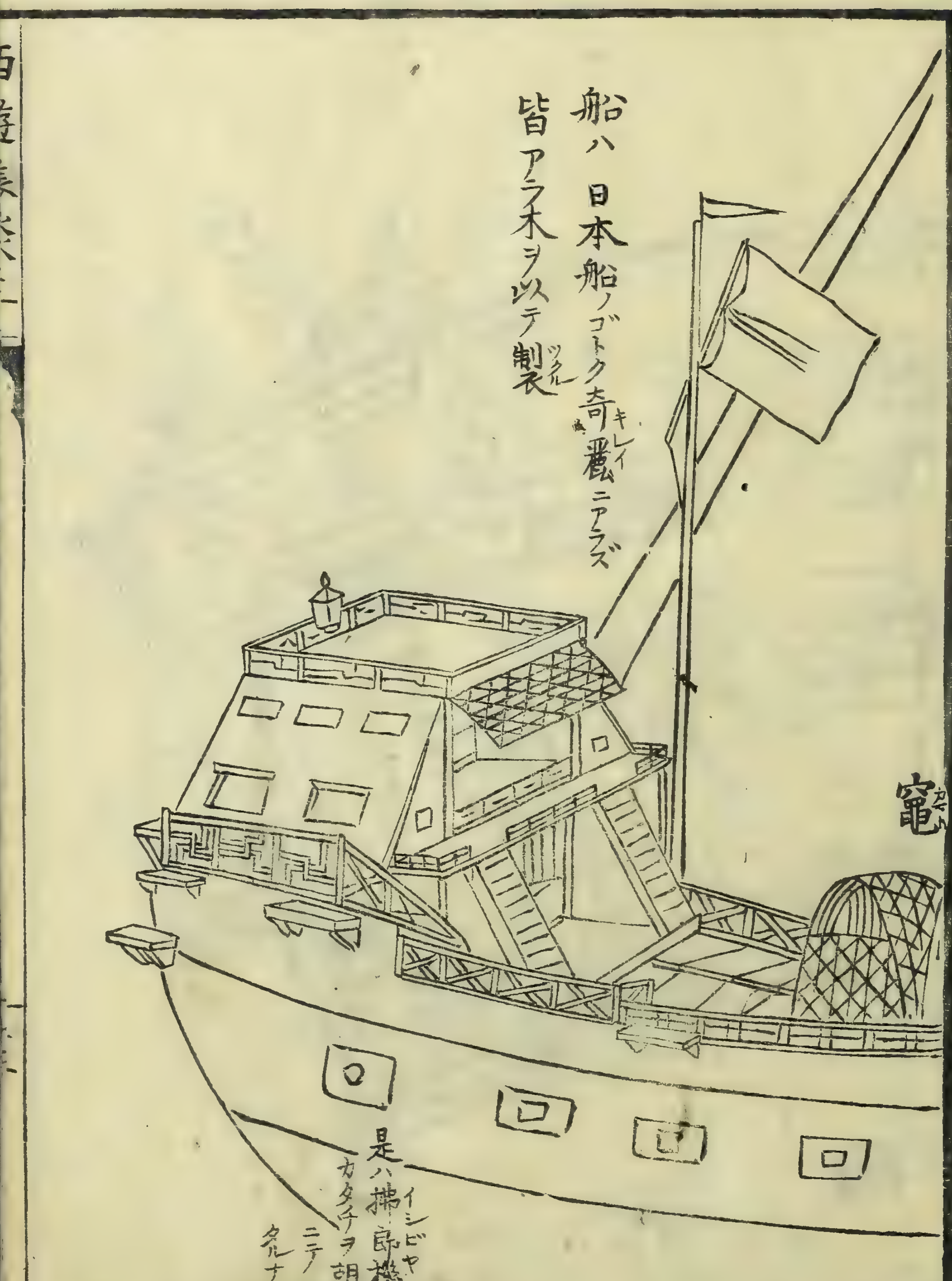
支那船ハ梅ケ崎に來りかゝり船の
大きさ十五六間帆ハ布にあらず
藤を以て籠をつくり竹にて隈
笹の葉を布き錠ハ木を以て
製し艫乃く万人物或ハ鷲の類
を彩緑をもて彩画事甚
俗なり其外ハ黒塗にして
四角なる形を白く画是ハ拂郎
機の形を画にかきしるものなり



支那船艫之形
帆ハ如此竹籠
隈毎の
永寳艪
綱ハ藤
或ハ椶櫚ニテ作ル
錠
木ニテ
白
白

支那(タウセン)船全圖




船ハ日本船ノゴトク奇麗ニアラズ
皆アラ木ヲ以テ製
竃
是ハ拂郎機ノカタチヲ胡粉ニテ描タルナリ


臺所
通詞館
西
北
江戸町


南
東

支那和蘭の外諸州の船を　日本に着ることハ伊勢國の大湊それより泉州堺に着又筑前博多あるひは肥州平戸に渡海して寛永辛巳の年今の長崎にある出島のうちカピタン（カピタンハ日本にてよぶ名也　彼国にてはヨツプルホウフドといふ　長の頭といふことなり）居所二ヶ所にあり一ヶ所ハ外より階子にて登る楼上四五間方なる所欄間下硝子額数十品を掲る其画人物山水花鳥の類ありして動くものと又椅子をとりすへおくぐいろいろの飾りおきしと也

阿蘭陀人　日本長崎より本国まで　日本里数にて

一萬三千里と云しかれどもおよそ二千四五百里隔る
ず此日本よりハ西に當(アタリ)少し南よりある故極て暑国
にて米を生ぜずパンといふものをつくる或(アルイ)ハ牛肉(キウニク)をもつて食(シヨク)とし故に印度(ヰンテ)
亜(ヤ)諸国より舩を通はし交易(カウエキ)をもつて第一の國務(コクム)とす。崑崙(クロンボウ)奴ハ

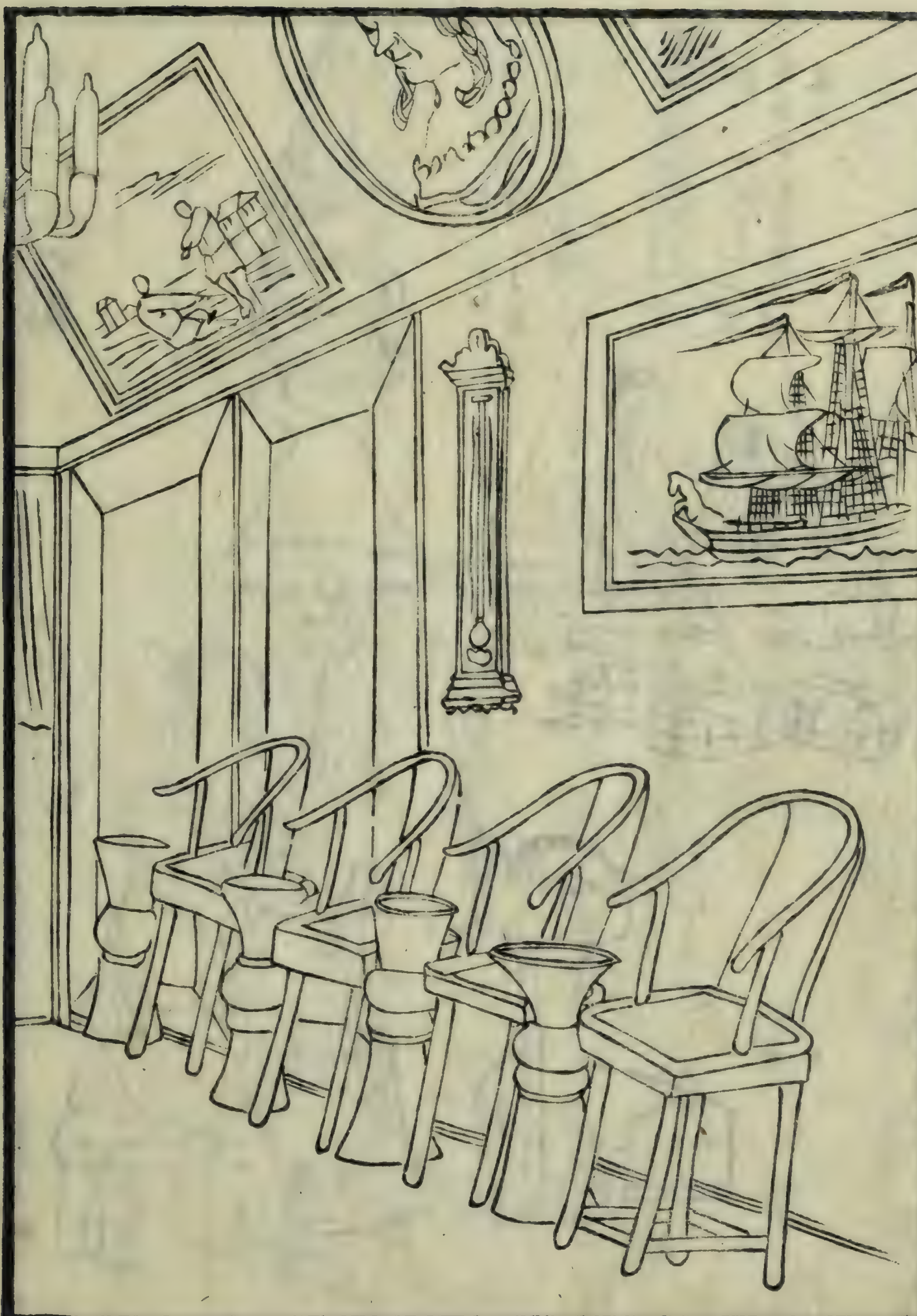
彼國の詞(コトバ)にてハスワルトヨンゴと呼(ヨブ)ジヤガタラの人なり（ジヤガタラハ赤道直下の国にて甚だ熱国なり）
阿蘭陀人の下奴(ゲヌ)として来る生色黒(クワクロ)うし

はうばうといへども使ふ墨を涅（ニガテ）にぬりたるやうし又黒（クロ）らう
ずるもあり夏月ハ裸（ハダカ）にして袈（ケ）裟（サ）乃やうなるものを纏（マトフ）あさき
ベンガラ縞（ジマ）なり冬月ハ和蘭（オランダ）より衣服をきるなりこれハ紅（オラ）
毛（ンダ）乃衣服のごとし羅紗又ハ更紗（サラサ）にて作る頭巾（キン）あり
世にクロンボウといへるもの是なり
ニタロスといふものあり是ハ船中乃水主（カコ）なりかこ申
船の仲間なりし賤しきもの水夫（スイヒ）をよくするもの也（クロンボウに同じ此ニタロスなり）此も又阿蘭
陀本國乃人なり言語も和蘭の辞（コトバ）なり顔色（ガンショク）ハ
白く髪（カミ）ハ栗色目も瞳（ヒトミ）赤し生れつき栗のごとの

散髪(サンハツ)衣服(イフク)阿蘭陀のごとし 此てタロス帆をはしらにのぼりて
身のかろき事飛がごとし
和蘭(ヲランダ)船は大サ四十間 表の方獅子(シヽ)をほりて總(スベ)てチヤン塗に
して黒し 艫(トモ)のうへに家形作(ヤカタツクリ)り内へ入る時玻瓈(ビイドロ)障子(シヤウジ)を前とり
天幕をはり 地球(チキウ)天(テン)球(キウ)をかけ 半(ナカバ)に楫(カヂ)を廻(メグラ)す車あ
りの左右に水夫(ワホ)をもて帆をはしら三所に建(タツ)てたり
下り入挿息機(イシビヤ)二十五左右にわかちて朝暮これをなるの
又十二三もならの事ゆり 是を祝事(シクジ)になるの事なし
彼國(カノコク)風(フウ)なり 船くとしらずしてなるの事なし 長崎者の杜撰(ヅサン)なるべしなるへし 又洋(ヤウ)中より出(イデ)てまし

要害にそなへ用事あるへし如何となれハ穢を散ど其あるゆゑ
まつ此國ハ火をもつて浄るごとし其音山に響く
霹靂のごとし荷物ハ船の底に積竈も下にありてしつらへて
桐を出す所より一段下に入煙硝を貯ふ所を總て船々とチヤン
まつて塗るゆゑやけざらんがためなり壽命を減ず又燈し
消火もおこらば是を氣に通せざれハなり故にウエンドルと云
具を製し氣を通せしむ支那の船の粗なると阿蘭
船の精ハ甚だちがひなり


ウエントル之圖
海底に沈したるものを取あげる器也
是もウエントルを以て事を通ず
焔硝守人

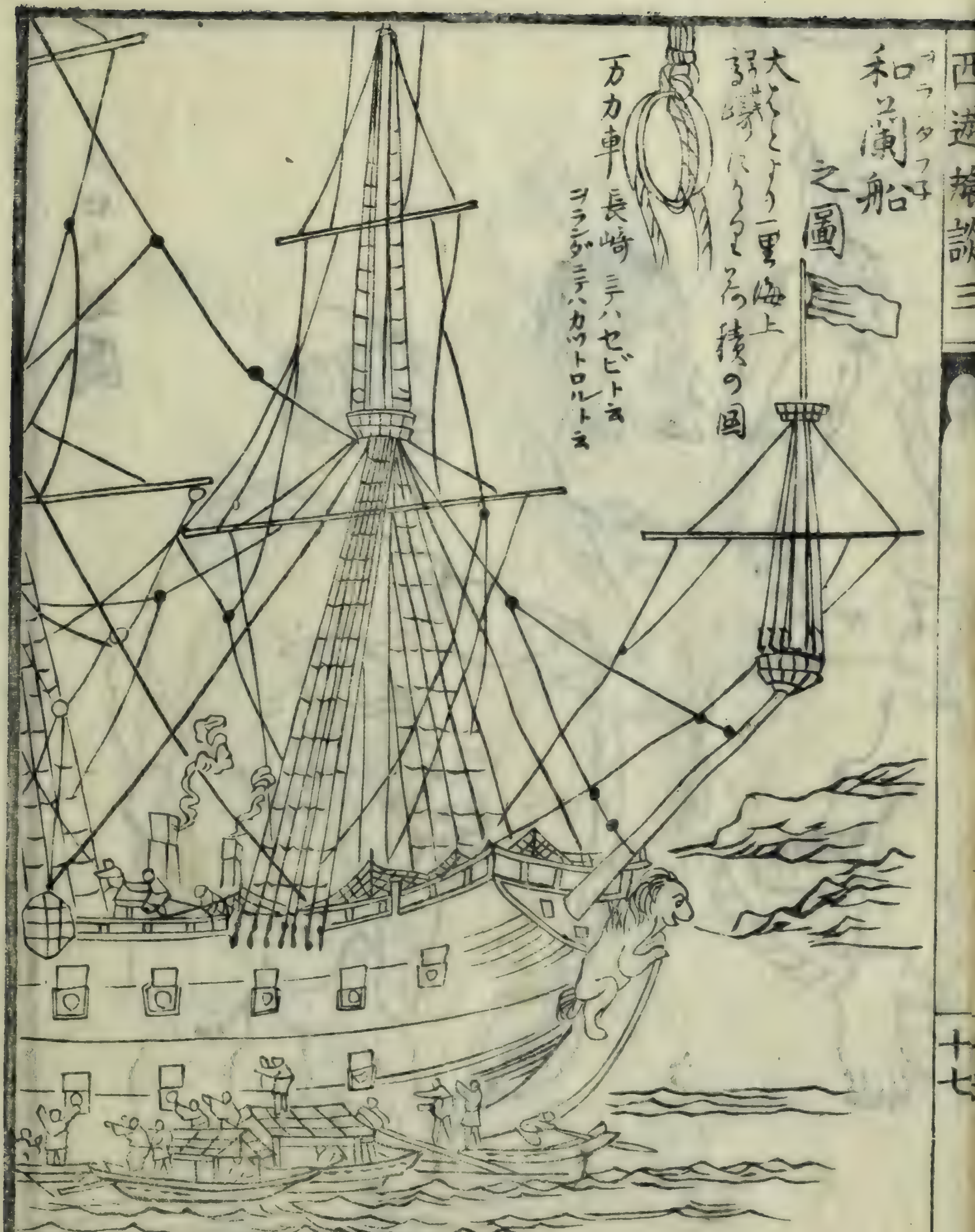


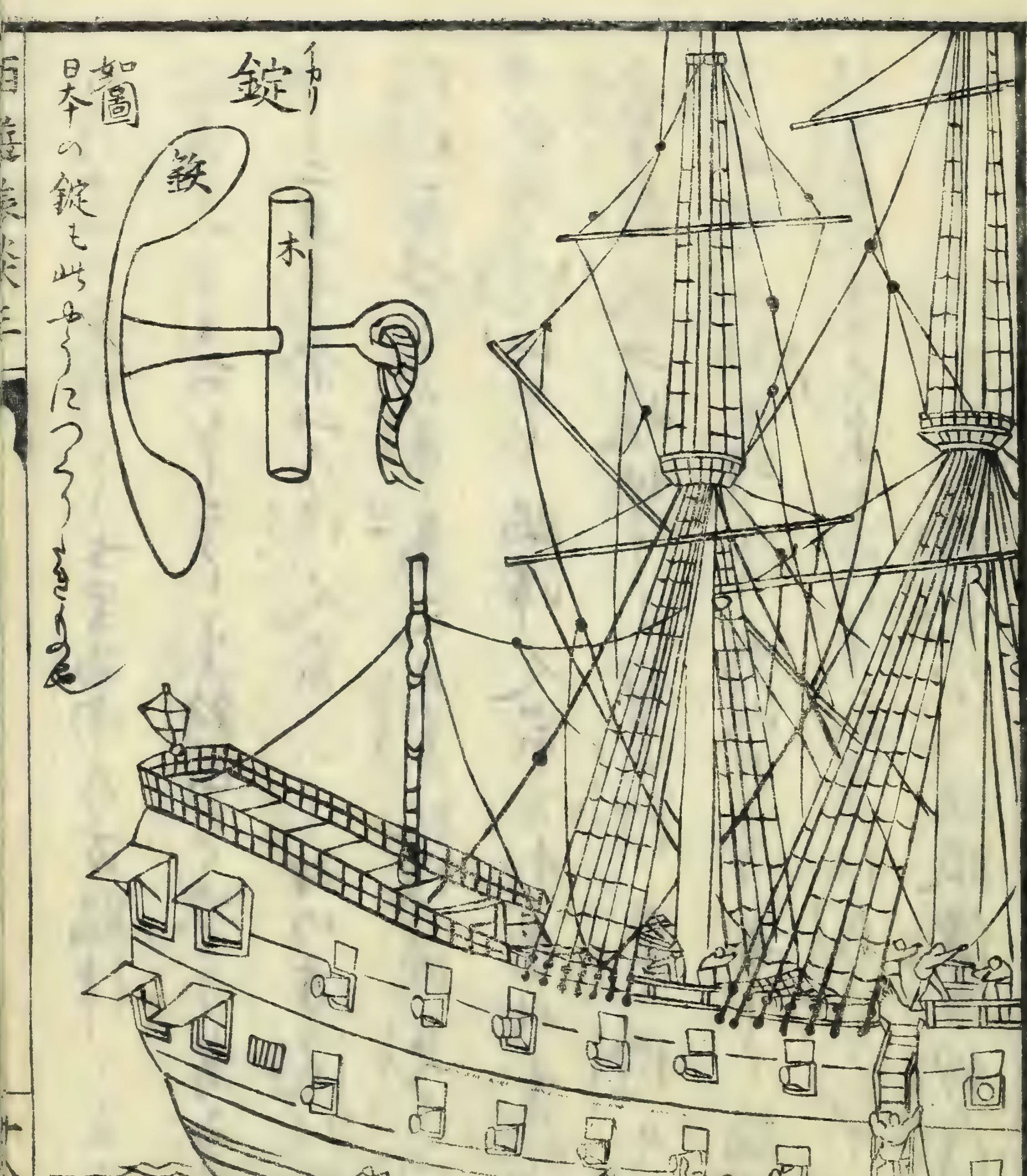

瑠璃燈
Kor


崑崙奴（クロンボウ）スワルトヨンゴ之圖
夏月ハ裸（ハダカ）冬ハ如圖



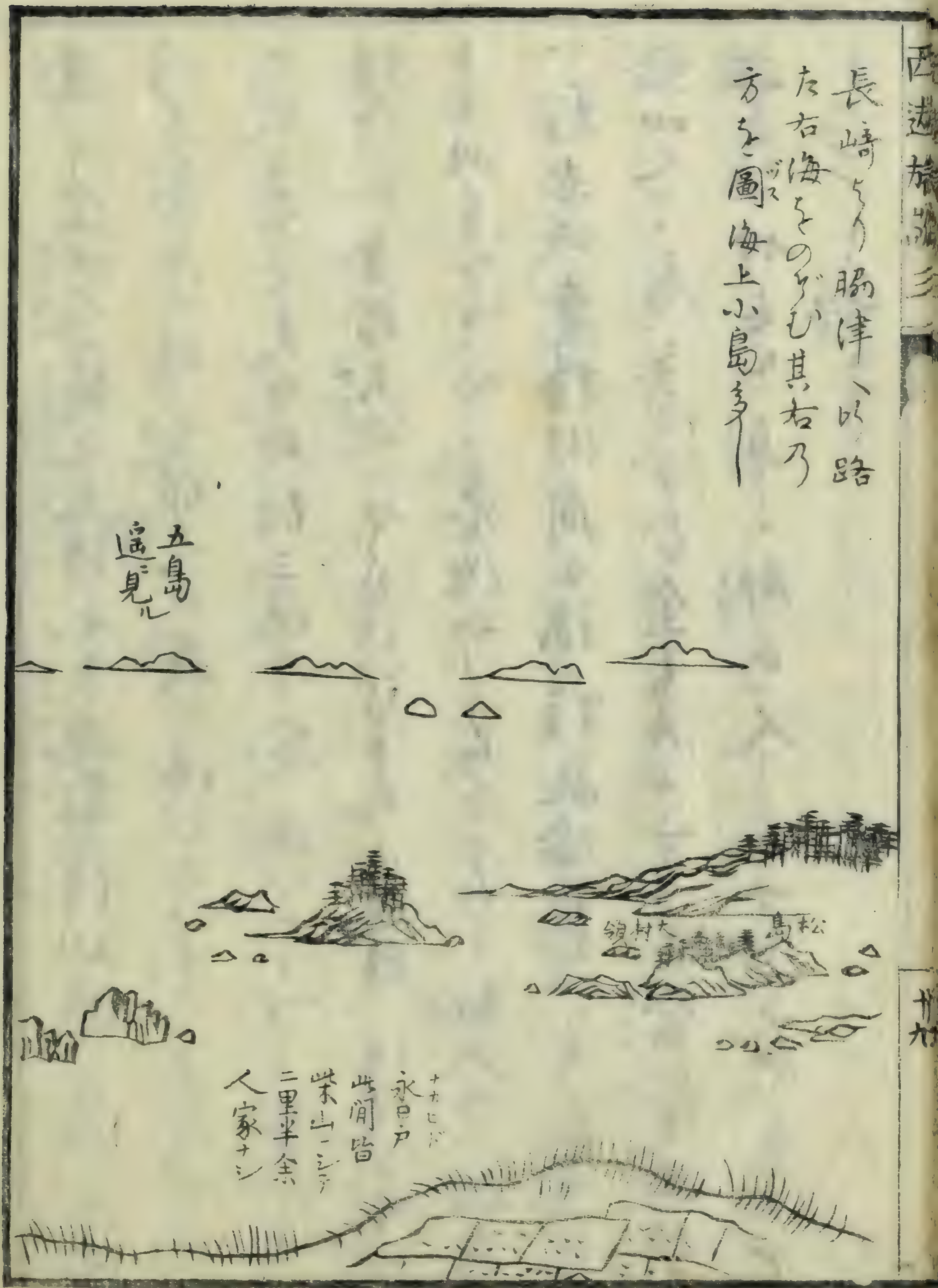
マタロス之圖


和蘭船之圖
大さとより一里海上
万力車 長崎ニテハセビト云
ヲランダニテハカツトロルト云


錠 イカリ
如圖
日本の錠も此やうにつくるへきもの
鉄
木

十月十二日長崎より七里西南の方脇津と云所に行戸町深堀なとゝ云所をすき海路山をめくり岩石を踏て行事二里半余山の頂に人家あり右の方遙に五島を見る是ヨリ四十八里左の方天草島又島原肥後の國見て向所此國なり日本の絶地なり脇津人家百軒余此辺琉球芋を食しぬ風土暖地にして雪不降ザボン橙なとの奇草をつくる」廿八日朝五時より大波戸より舟にて稲佐悟真寺に支那人七十人余墓詣の船岸に並ひて太鼓笛を吹寺まて送りぬ夥長八人衣服繻子紗綾の類色々

黒き余下人ハ鼠色木綿也 大通辭清川榮左衛門 下通
詞吉島庄十郎 支那人曰 我か佛系いしらに寺も
大破ニ及べり 夫か砂糖三俵ヲ寄進いたすべし 斯かしの
住僧ハ身持不正バ甘まにいさんと通辭住僧を呼出
し 此ことを申する 老僧かしらをさげて恥入ける 船頭
ハ程赤城 費精湖 周壬禄 程敬倫の者らく卓子ヲ
盤四人ヲ席をさらぬ 余も共に申して食ハ又画お
描けれバ姓名を尋する 都の人と云申されハキンジン
キンジンと呼けり


長崎より彼杵へ行路左右海をのぞむ其右の方を圖海上小島多し
五島遥ニ見ル
大村領
松島
永日戸
此間皆柴山ニシテ二里半余人家ナシ


五島城下


長崎ヨリ七里
西ノ方脇津
此所ニ三崎観音アリ
長崎ノ者多参詣ス
五島
遠見ばん
脇津
芝山ニシテ
木ナシ


肥後
椛島かばしま

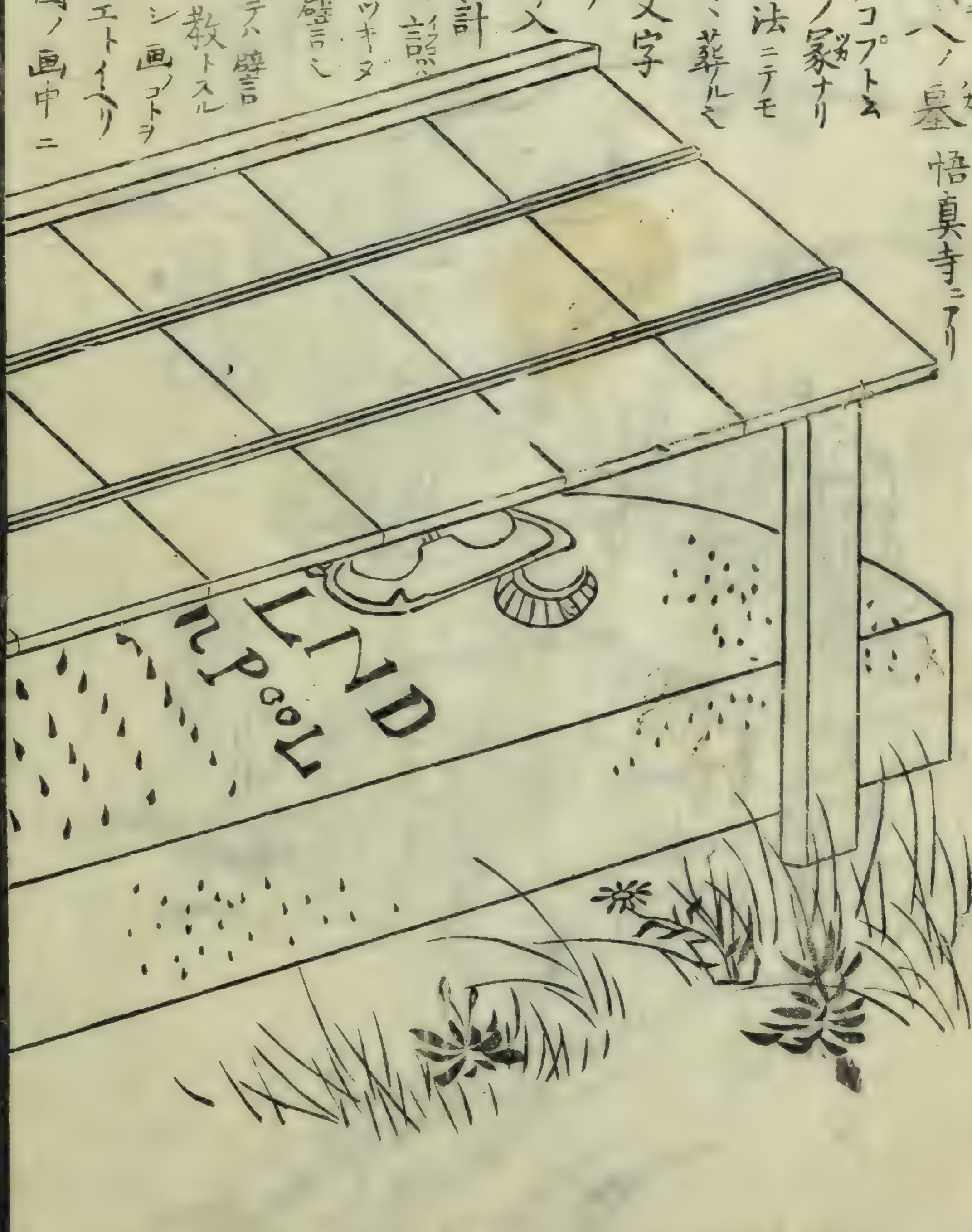


悟真寺支那人之墳墓

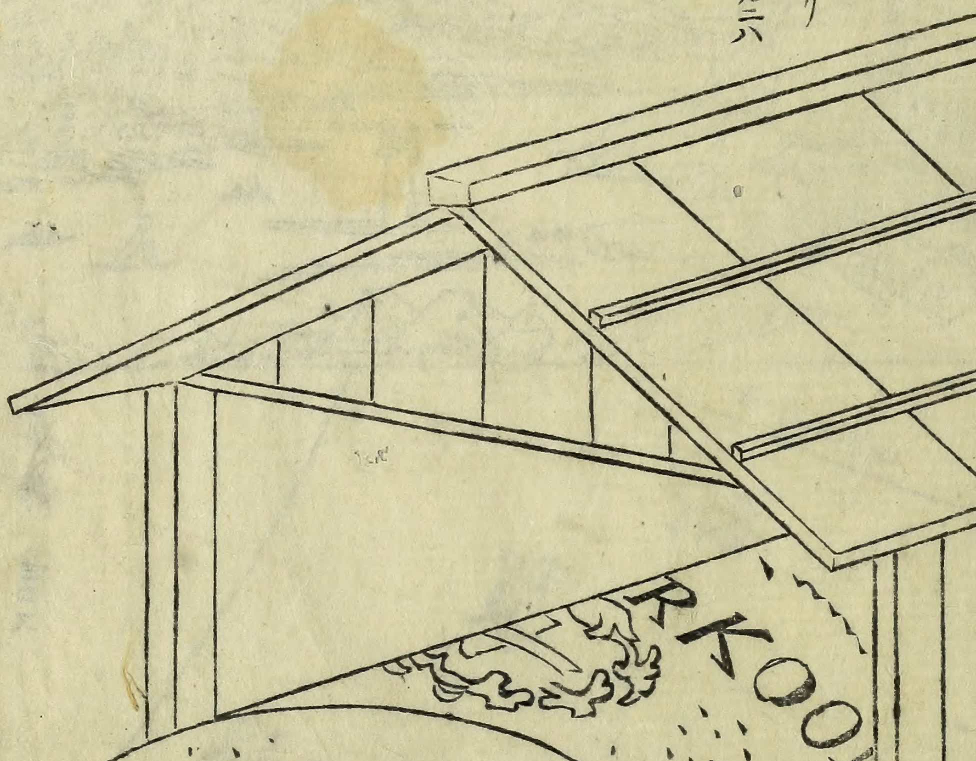

支那人ハ卧葬
トテ卧タルマヽニテ
葬ル

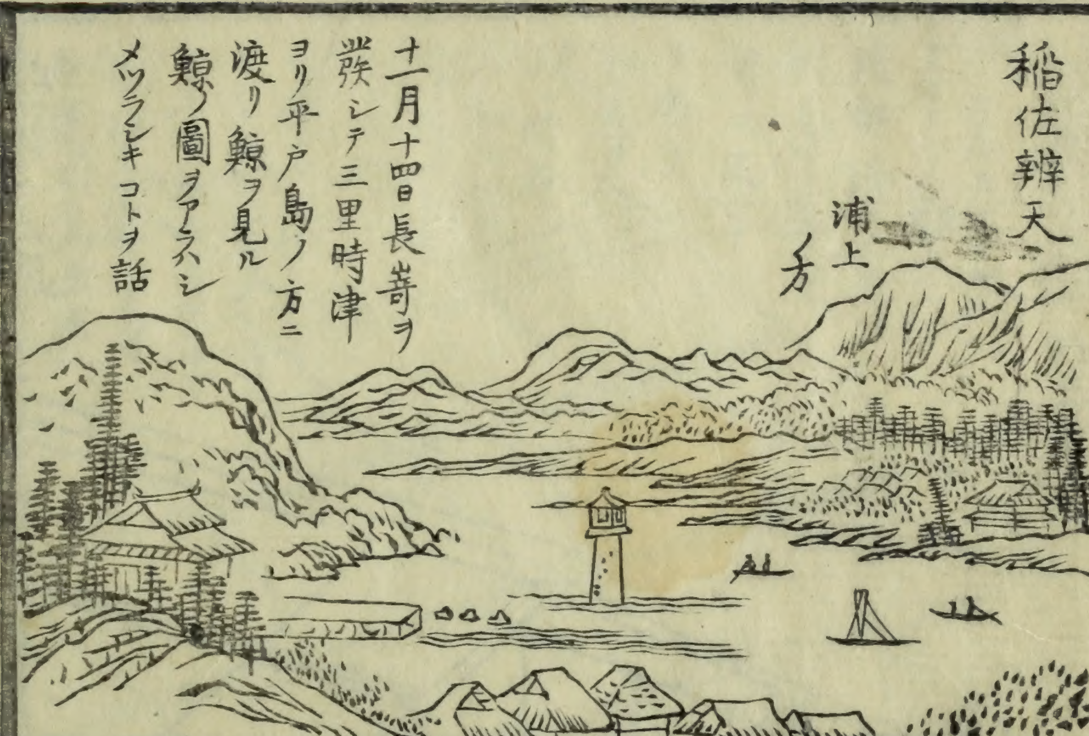
和蘭(ヲランダ)人ノ墓(ハカ) 悟真寺ニアリ

ヅウルコプトムカピタンノ冢(ツカ)ナリ彼國ノ法ニテモ卧タルヽ葬ルヽ碑ニ文字ヲ彫テ金色ヲ入上(カミ)ニ時計ヲキザム諺(イフコト)ハ漏刻(ロウコク)ツキヌルト云譬言ゝ波國ニテハ譬言ヲ以テ教トスルコト多シ画ノコトヲ則タトエトイヘリ又波國ノ画中ニ

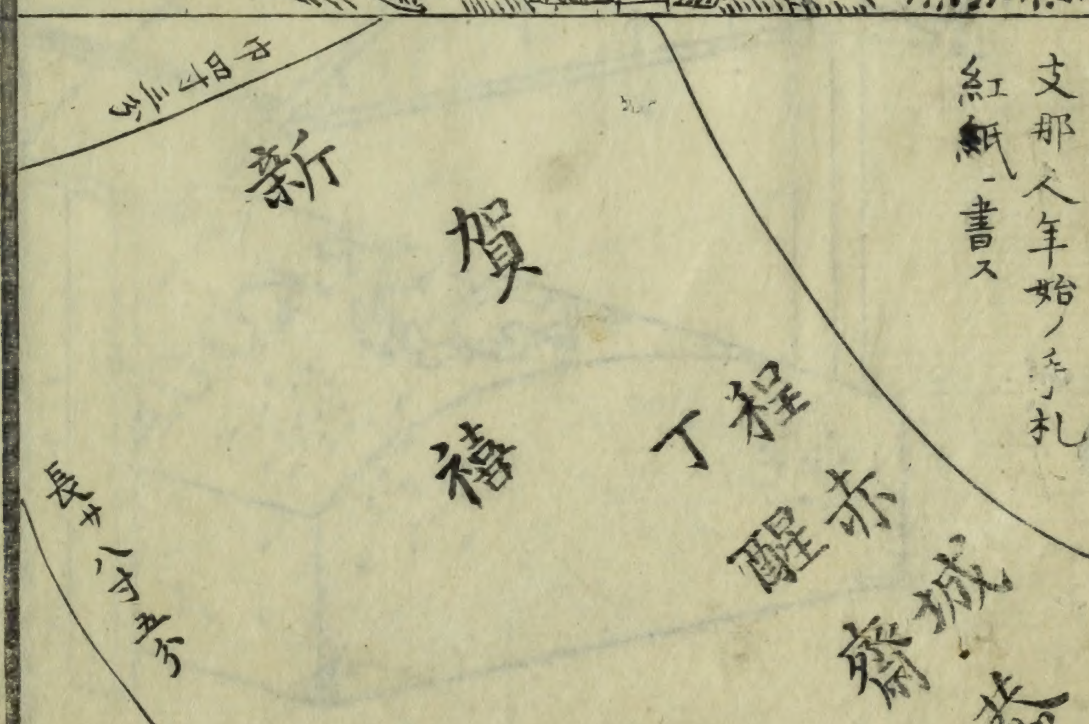


両翼アル人物或ハ異形ナル圖アリ皆タトヘヲ画シタルモノナリカツテ羽ノアル人ノアルニハアラズ





支那人年始ノ手札紅紙ニ書ス



巻之三終